

北海道白糠町奥高安遺跡について

澤 四郎^{*}・西 幸隆^{*}
松田 猛^{**}・神野 一郎^{***}

Notes on the Okutakayasu Site Shiranuka Hokkaido

Shiro Sawa Yukitaka Nishi
Takeshi Matsuda Ichiro Kamino

1. はじめに

ここに報告する一群の資料は、1971年に、白糠町和天別1851番地に所在する音別町有林、通称奥高安地域の草地改良工事で出土をみたものである。

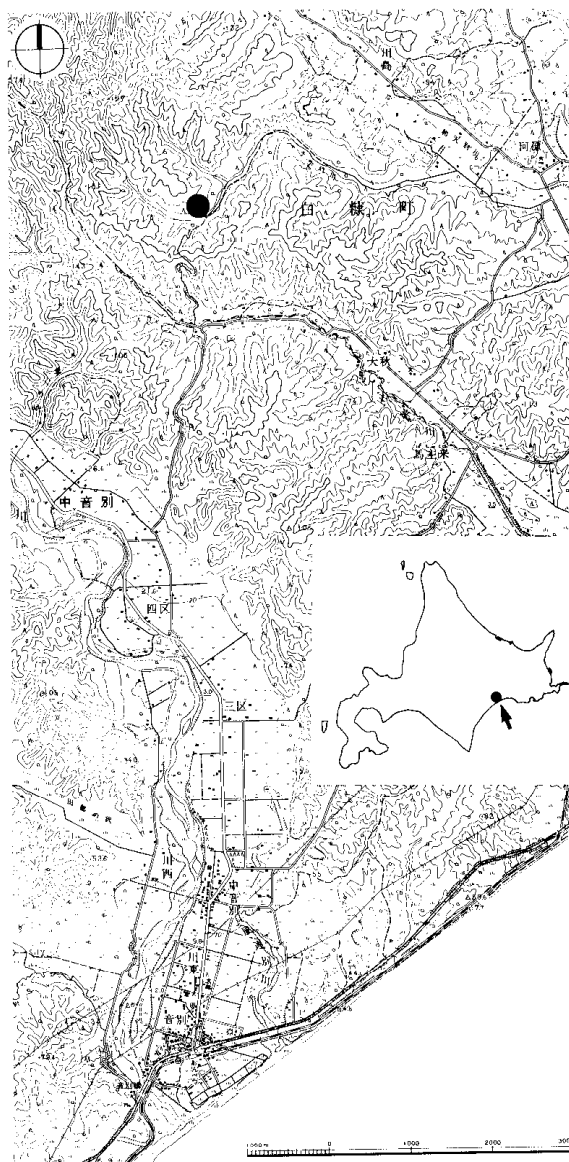
本遺跡発見の動機は、この年7月2日、音別町役場の総務課長をしていた神野が、町有林を利用した草地改良工事であることから、その一部工事完了に伴う検定のため、同地を訪ずれ、遺物の出土を知ったことにはじまる。この情報は、町教委を通して北海道教育庁釧路教育局に連絡され、7月30日、神野の案内で、関係者の現地踏査となった。これには澤も参加した。その結果、遺跡は機械力により完全に近いまでに、破壊されたと判断されたが、出土遺物の中に、縄文早期末から中期に至る幾つかの興味ある資料が含まれ、又音別川とか茶路川などの比較的流路の長い河川にはさまれながら、流路の短い和天別川上流域における数少ない遺跡である、さらに立地面でその性格を探る上で重要であるなど、いろいろなことが考えられたため、付近の類似遺跡の存在を調査した上で報告したいと考えていたのであるが、ついにその機会を持たないまま今日に至ったものである。

本稿の作成にあたっては、石器の図版及び記載を西が、縄文原体について西・松田が、土器の図版を松田が、その他については、全員で討議し、澤と西でまとめた。なお土器については大沼忠春、桑原護氏のご教示があった。写真撮影は加藤春雄氏による。銘記して感謝申し上げる。

2. 遺跡 (第1図)

奥高安遺跡は、白糠丘陵を切刻して流下し、白糠町市街の西方で太平洋に注ぐ和天別川の支流、シャチホロ川左岸にある。音別市街から北へ10km、和天別川口から約11.5km離れて位置し、現海岸線からは約8.8kmほど内陸寄りである。ここは、北の山地から南東方向に流路をとってきたシャチホロ川が、東方に向きを変え林道沿いに下る屈曲部の左岸にあたる。この流れは、0.5kmほどで、

もう一つの支流を合せ、再び南東に流れ下り、和天別川本流に合流する。海拔高度は50m内外で、そう高くはないが、付近水面との比高は、北側山地寄りで20m、それより40~50m下る南側では5mと落差の大きい斜面で、集落選択の場所としては、必ずしも居住性に恵まれた



第1図 北海道白糠町奥高安遺跡位置図

^{*} 釧路市立郷土博物館 ^{**} 釧路市埋蔵文化財調査センター ^{***} 音別町在住

立地条件は備えていない。ここを流れるシャチホロ川は、水源に近く、川幅も2m未満で狭い。遺跡西側は急勾配をなし流れは速いが、屈曲して流路を変えた南側裾は平坦な湿地であるため緩やかである。川床は全体に泥質で、けっして魚族の豊富な川とすることはできない。遺物はL字状の流れに沿う約50m四方に、若干の自然礫や焼石と共に散乱していたものであるが、その後本地点に続いて付近一帯46haに及ぶ整地がおこなわれたにもかかわらず、他の地点で遺物の出土は皆無であったことを考え合せると、幾つかの時期にまたがる遺跡であるとは言え、極く限られた空間が集落としてくり返し利用された小規模遺跡ではなかったかと思われる。

この付近の植生は、台地丘陵においては、シラカンバ、ミズナラ、イタヤカエデ、ケヤマハンノキ、ナナカマドなどの落葉広葉樹類が優占し、これらにイチイ、トドマツなどの常緑針葉樹が混在する混交林からなり、やや湿った沢沿いはヤチダモ、ハルニレ、ヤナギなど湿性林が優占し、沢沿いにエゾニワトコ、ノリツギ、ホザキノシモツケが繁茂し、林床の草本類が豊かなところである(新庄1976)。山全体の日当たりも、音別町の国境山地周辺に比しよい。夏、冬通してエゾシカの生息に好適な環境を提供している地帯で、現在でもエゾシカの生息する地域である。

3. 遺 物

(1) 土器 (第2図・第3図)

縄文早期から中期の破片に限られ、他の時期のものはない。中期胴部片1点以外すべて図示した。

第2図1は、東釧路Ⅳ式の底部に近い破片で、胎土に微量の繊維を含む。器質は硬い。撚りの雑なRの撚糸文がみられる。東釧路Ⅳ式にはこの手の撚糸文が多用され、底部文様としては普通である。厚さ7.5mm。

第2図2は東釧路Ⅳ式の口縁部に近い破片かと思われる。内外とも黄褐色を呈した明るい感じの土器で、繊維の混入はまったくない。器質は至って硬い。厚さ6mm。

第2図3は当地方では初の出土例である。器形は口縁がやや外反し、肩の少し張る鉢形を呈するかと思われる。胎土に微量の繊維を含むが、器質は硬い。色調は、表面黄褐色を呈し、内面は黒色でざらついた感じである。しかし母材の粘土は第2図1と異なり細かい。文様はRの原体を重ね押したもので、節の密な圧痕とそうでない間のびした圧痕の2種が観察される。頸部文様施文後、口唇の一部に縄を折り曲げて押しつけ刺突文風の効果をあげている。

口唇に縄又は刺突、刻目等を加える例は、道東の縄文

早期の平底の鉢形土器にしばしばみられるものであるが、全体から受ける感じは異質である。大沼忠春氏のご教示によれば、円筒下層cないしdに比定される特徴を備えているという。道東における今後の出土例に注目したい土器である。厚さ7mm。

第2図4は幅18mmほどの隆帯をめぐらし、内外面にLRの斜行縄文を施文し、胎土に比較的目立つ量の繊維を含む軽い焼きの土器である。色調は内外とも褐色を呈し、その上に煤が付着していた。拓影左下に粗雑な刺突らしい痕跡があるが、意図的か、偶然の所産か判別できない。3より新しく、5以下の土器群より古いとみてよいが、今後の出土例に期待したい。厚さ8mm。

第2図5は円筒土層式後半に対比される(註1)。灰黒色を呈し、胎土に繊維を含まず、器質は硬い。無文地に波状浮線文が施文された土器であるが、左側を剥離している。浮線文上にはLの一条の縄が押しつけられている。これは浮線下端沿いにもあり、馬蹄形撚糸圧痕文を想起させる。下方の無文帯は平滑である。大島直行氏の深鉢形の変遷に従えば、第Ⅳ段階の土器群に対比されよう(大島ほか1975)。厚さ11mm。

第2図6・7・10はいわゆるモコト式に比定される(宇田川1977・藤本1979・藤本1980)。6は石英片、細礫、繊維を含み、器質は硬い。LR {3ℓの縄文が施され、口縁の突起下に径11mmの円形刺突を有し、別に突引文を垂下する。同種の刺突は口唇にもある。体部の突引きの「くせ」は上→下の順で、厚さ10mm。7は厚さ6mmの胴部片で、内外に6と同種の縄文を施し、幅6mmの隆起帯を持つ。胎土の繊維の含有量は6より多い。10はLRの縄文が施文された破片で、黄褐色を呈するが、胎土に繊維を含み器質は硬い。

第2図8・9・11、第3図1・2は北筒Ⅱ式の古手、トコロ6類に比定される。8は微量の繊維を含むが、器質は硬い。LRの縄文が施され、口縁の肥厚帯は顕著でない。径9mmの円形刺突文を並列させるが、施文にあたり内側をおさえ刺突によって生じる盛り上りを調整したため縄文は指一本の幅で消されている。肥厚帯頂部の縄文磨消もこの工程と関連した疑いがある。円形刺突文の原体は、本来5mm内外で刺突後の回転を加え外形を大きくしている。口唇とその外角に右から左へ移動する突引文がある。刺痕幅は口唇が6mm、外角3mmで、外角の刺痕は深い。突引きは、外角が先で、口唇が後である。外角の刺痕幅の狭さはこれに由来するものらしい。厚さ10mm。

9は褐色を呈した器質の硬い土器で繊維を微量に含む。RLの縄文が施文され、口縁に小突起を有し、肥厚帯上に右から左へ移動させて施文された刺突文が並ぶ。これ

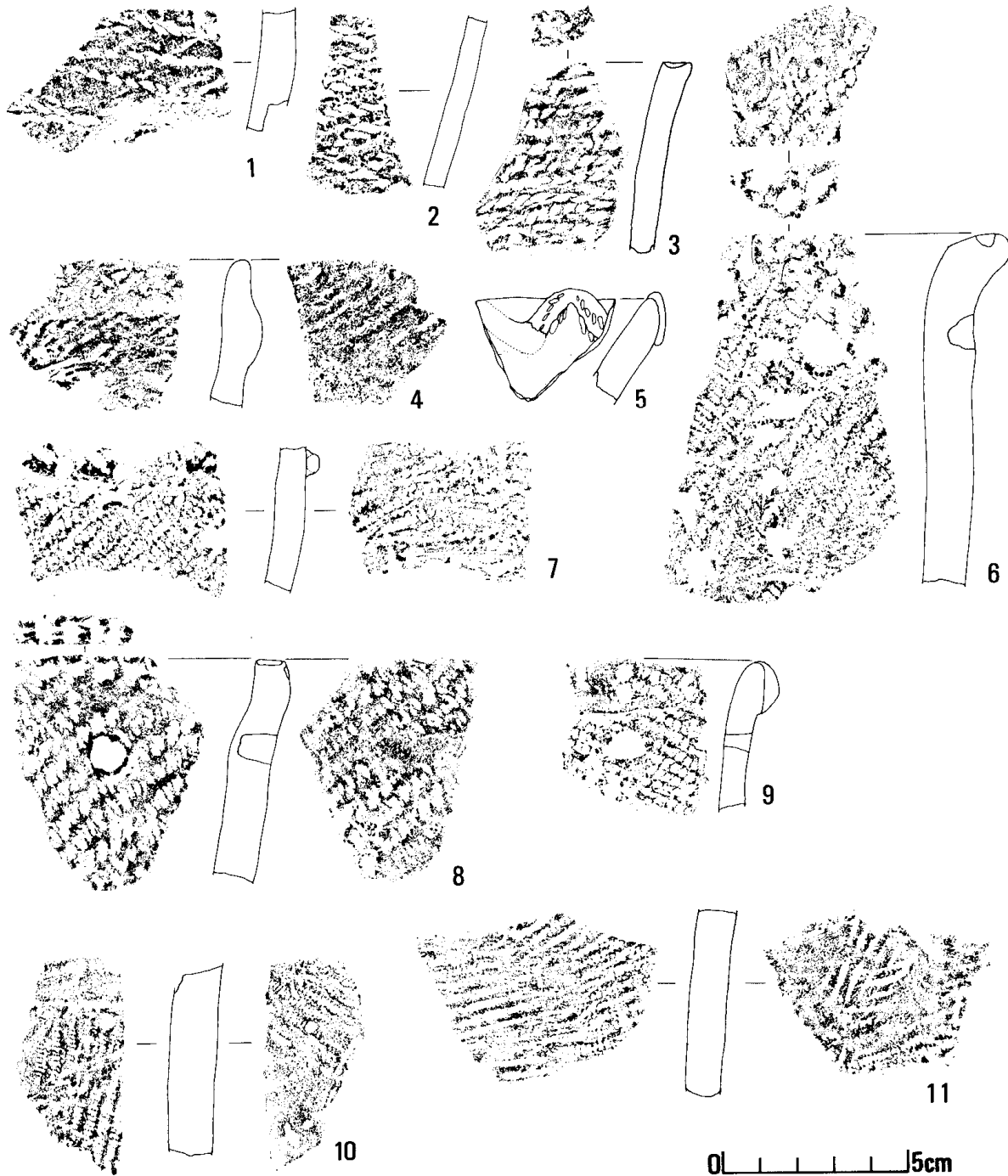
は下、上の交互くり返しの可能性がある。肥厚帯下に径4mmの円形刺突文が水平に施されるが、両端断面にかかり図に現われない。中央の貫通孔は円形刺突文の部分に穿たれた補修孔らしい。厚さ6mm。

第3図1は6個以上の山形突起を持つらしい。LR { 3 l と RL { 3 r の結束のある羽状縄文が施文され、口唇及び肥厚帯上半部に3列の左から右への連続移動による突引文が認められる。突引文の施文順位は下2列は不明瞭だが口唇の突引列は肥厚帯上段の突引列上端は引き

消されていて最後におこなわれたことを物語っている。肥厚帯下に並ぶ径12mmの円形刺突文は、半円に近い原体を回転させて施文したものであるが、捩りとられた粘土の重なり具合からは右から左への動作が想定される。内面の縄文は結束以下半分が調整で消されている。厚さ10mm。

第2図11はLRの縄文が施文され微量の繊維を含む。器質の硬い土器である。

第3図2はLR { 3 l の縄文が施文され、微量の繊維を含む朱塗り土器である。内面に調整痕がある。本例と



第2図 白糠町奥高安遺跡採集の土器 I

第2図8及び11の胎土、焼成、色調には全体に共通するものがある。

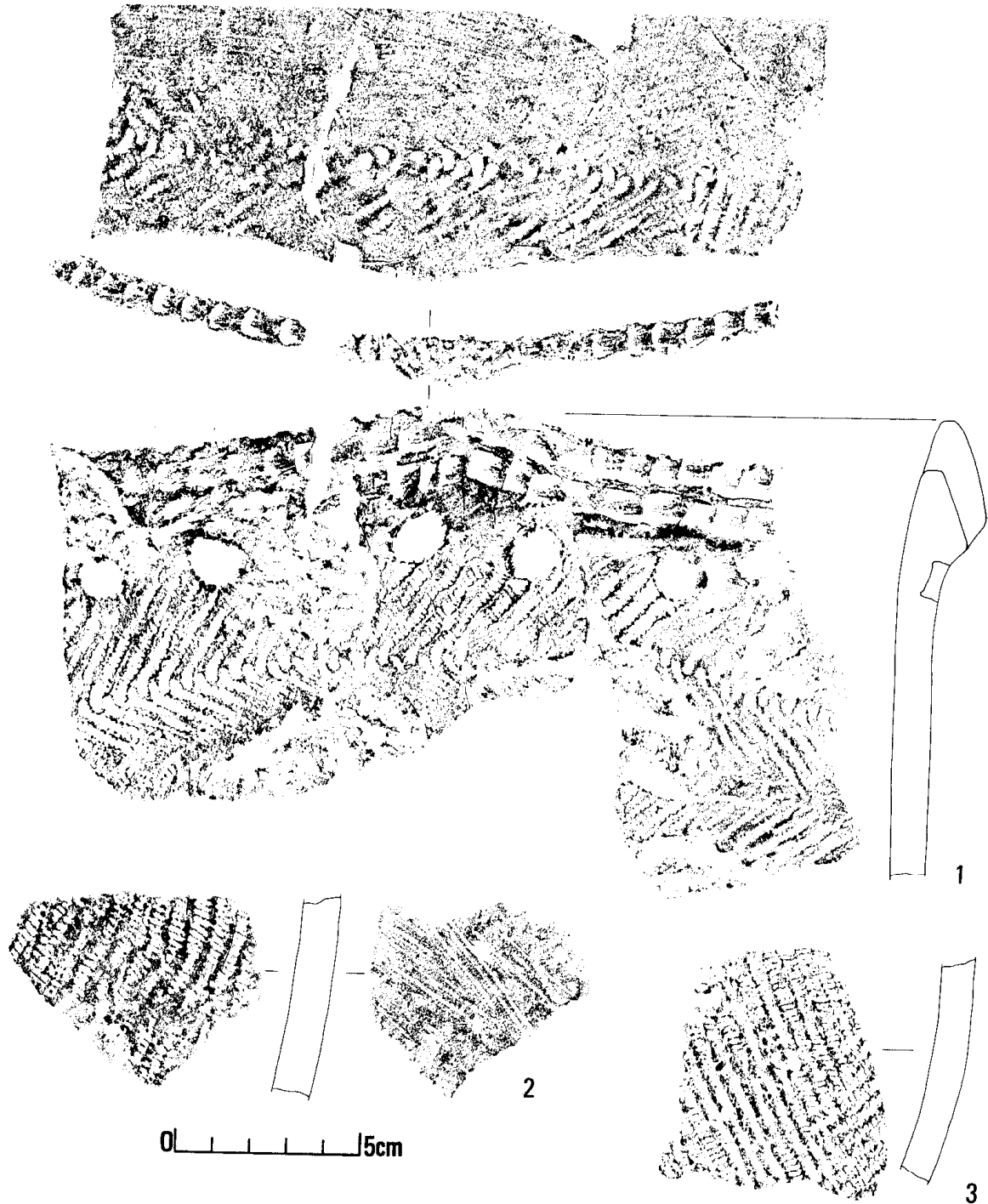
第3図3はLR {3の縄文が施文されている。径3～4 mm内外の細礫を含むが繊維をみない。内面は滑沢で器質は硬い。縄文の回転を変え交錯する縦位の羽状縄文を持つ土器は、北筒Ⅲ式の新しい部分から出現するが、本例の示す特徴は北筒Ⅳ式に共通するものである。厚さ9 mm。

(2) 石器 (第4・5図)

本遺跡において採集された石器は、図示した資料のほか

石核及び石核残欠3点、不定形の剥片に二次加工を施した削器19点、剥片129点(加熱を受けたもの1点を含む)がある。図示資料を含めて、いずれも黒曜石を素材としている。

石核(第5図15) 楕円礫を利用しており、ある程度原石面を剥離し全面に調整剥離を加えた後に一方向からの打撃によりプラットフォームを作出している。プラットフォームより剥離される剥離面は図示した一方向の面に限られ、一方向からの打撃に限られている。打撃面と剥離面の角度は図示していないが、ほぼ直角に近い。石



第3図 白糠町奥高安遺跡採集の土器2

核から剥離された剥片は、現存する剥離面の観察ではほぼ3cm前後の長さに限られる。しかし、第5図13、14に示した石刃様剥片などから、比較的長い粗雑な石刃を作出することのできる石核の存在していることは明らかである。図示していないが、調整剥離が加えられず、わずかなブラットフォームを利用して一方向から打撃を加えた石核が1例ある。従って、原石面を留めており、剥離される剥片は不定形なものとなる。

石鏃（第4図1～7） 1～5は、いずれも有柄で、2・3はこの時期に特有の基部の長い形態を呈している。主剥離面、背面共に押圧剥離が施される。1は基部を欠くが、4は押圧剥離の段階で不規則な側縁部を作出しており基部近くで両側縁からの挟入をもつ。6、7は、1～5の石鏃とは異り、7は形態的にも異質であるが便宜上本類とした。むしろ、6は石銛とされるグループであり、7は薄手で尖鋭な先端部を作出しているが、あるいは削器としての機能が考えられる。

石槍（第4図8～11） 全例とも比較的大形の石槍からなる。8、10は先端部を欠損しているが、石槍の基部に相当し10では舌状に近い基部の挟りがみられる。9は縄文中期の北筒式土器に伴う典型的な石槍のひとつと言える。実体顕微鏡による観察では、両端部を破損している11で両面に横走する擦痕がみられ、部分的に稜線が磨耗している。

異形石器（第4図12、13） 12は全面に押圧剥離を施し、両側縁で二ヶ所にわたり相対する尖出部をもつ。先端部を尖鋭に作出しており、石器としての機能を十分に備えていると考えられる。実体顕微鏡によると、中央部及び下端部の両面に横走する擦痕がみられ、稜線の磨耗が著しい。このことから検討すると、尖鋭な先端部を利用した石器としての機能を想定できる。13は、先端部を欠いており、背面では全面に押圧剥離を施すが、主剥離面は両側縁からの挟入部と先端部にわずかに二次加工が施されるにすぎない。

石匙（第4図14～16） 縦形石匙で14、16のように明らかに両側縁から挟入をもつものと、15のようにわずかに挟入を施した痕跡をもつものがある。15は主剥離面の二次加工が下端部にみられる程度で背面に細かい押圧剥離が施される。17、18にも側縁部の一方向からの挟入があり、機能的にはこれらのグループに含められるが便宜上削器として分類している。

削器（第4図17～23、第5図1～12） いくつかの種類に細分される。第4図19、20は粗雑な加工による剥離面を留めており、19で先端部、側縁部に細かい加工が施されるにすぎず、第4図21～23とは異なる。21～23は両面

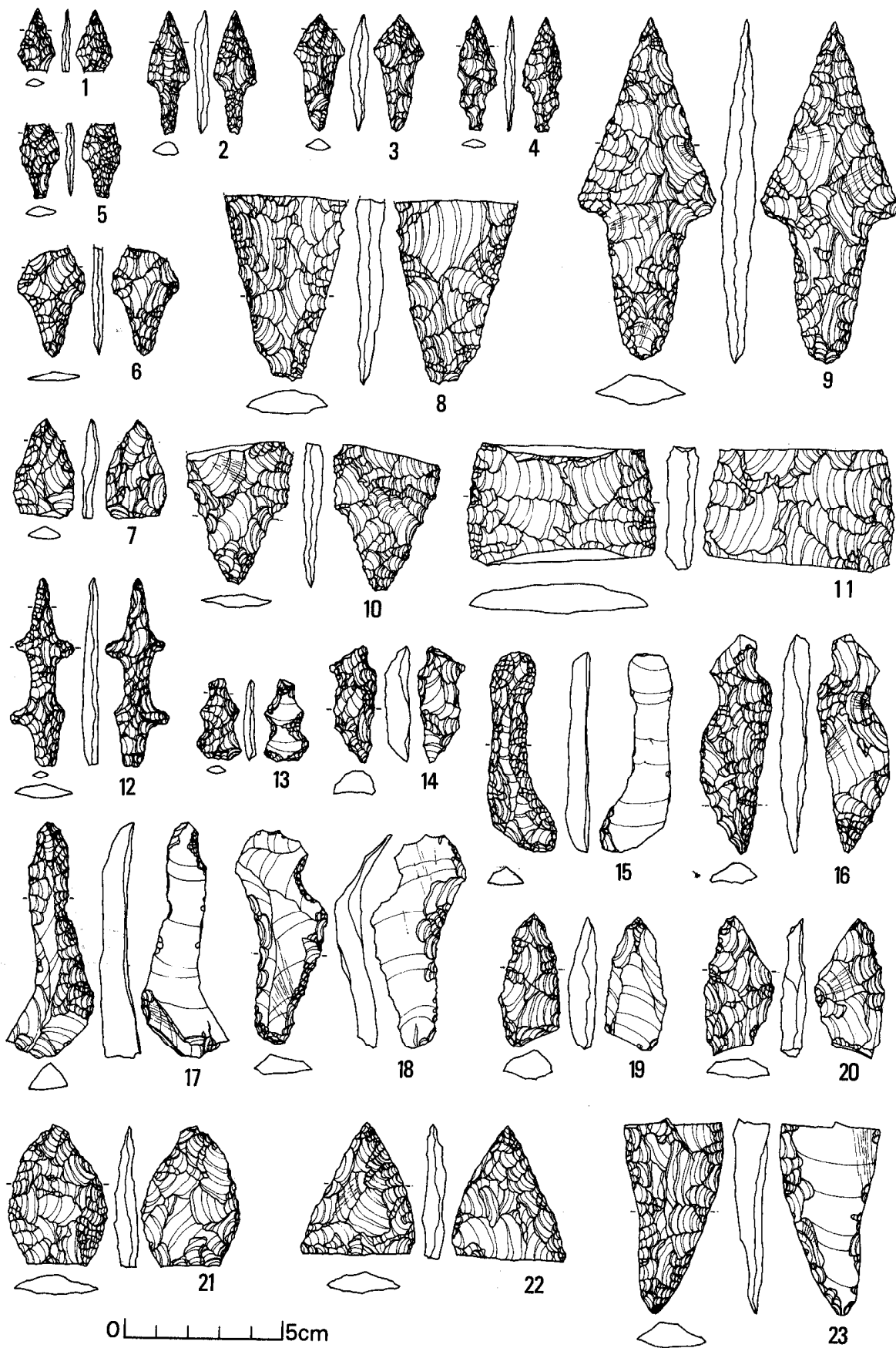
及び部分的に側縁部に入念な加工が施され、むしろ尖頭器としての如き先端部を作出している。第5図1～5は、やや大型の剥片を利用して加工を施したもので、それぞれに特徴がみられる。1は、両面ともに入念な押圧剥離が施されるが、下端部に急傾斜をもつ刃部を作出している。2、3についても同様に下端部に細かい加工が施される。3では主剥離面の二次加工が施される刃部に細かい擦痕が観察され、擦痕の方向は一定ではなく刃部が磨耗している。背面では擦痕がみられず磨耗痕もたない。4は両端部にやや傾斜する刃部を作出しており、側縁部では粗雑な剥離がみられ入念な加工はもたない。5は、側縁部に部分的に細かい加工を施しており、1～3にみられるような刃部をもつ。これら1～5は、いずれも大型の剥片を利用し、両端部もしくは一方の端部に入念な加工を施す点で共通し、本石器群の中でも特徴的な石器としてグルーピングされるものである。

以上のような、比較的定形的な削器と、第5図6、12にみられるように粗雑な剥片を素材として側縁部に刃部を作出したもの、第5図7～11のように不定形な剥片を素材として、わずかに二次加工を施したものがある。6は、石核から剥離された粗雑な石刃の両側縁部、下端部に二次加工を施したもので、主剥離面では左側縁部にわずかに施されるにすぎない。7～11にみられる二次加工は、両面の一方の側縁部に施されるもの（7）、側縁部に部分的に施されるもの（8、10）、一方の端部に施されるもの（9、11）があり、素材となる剥片によって異なる。図示していないが、剥片に二次加工を施した削器19点についても、多くはこのグループに含められるものであり、剥片自体も不定形である。

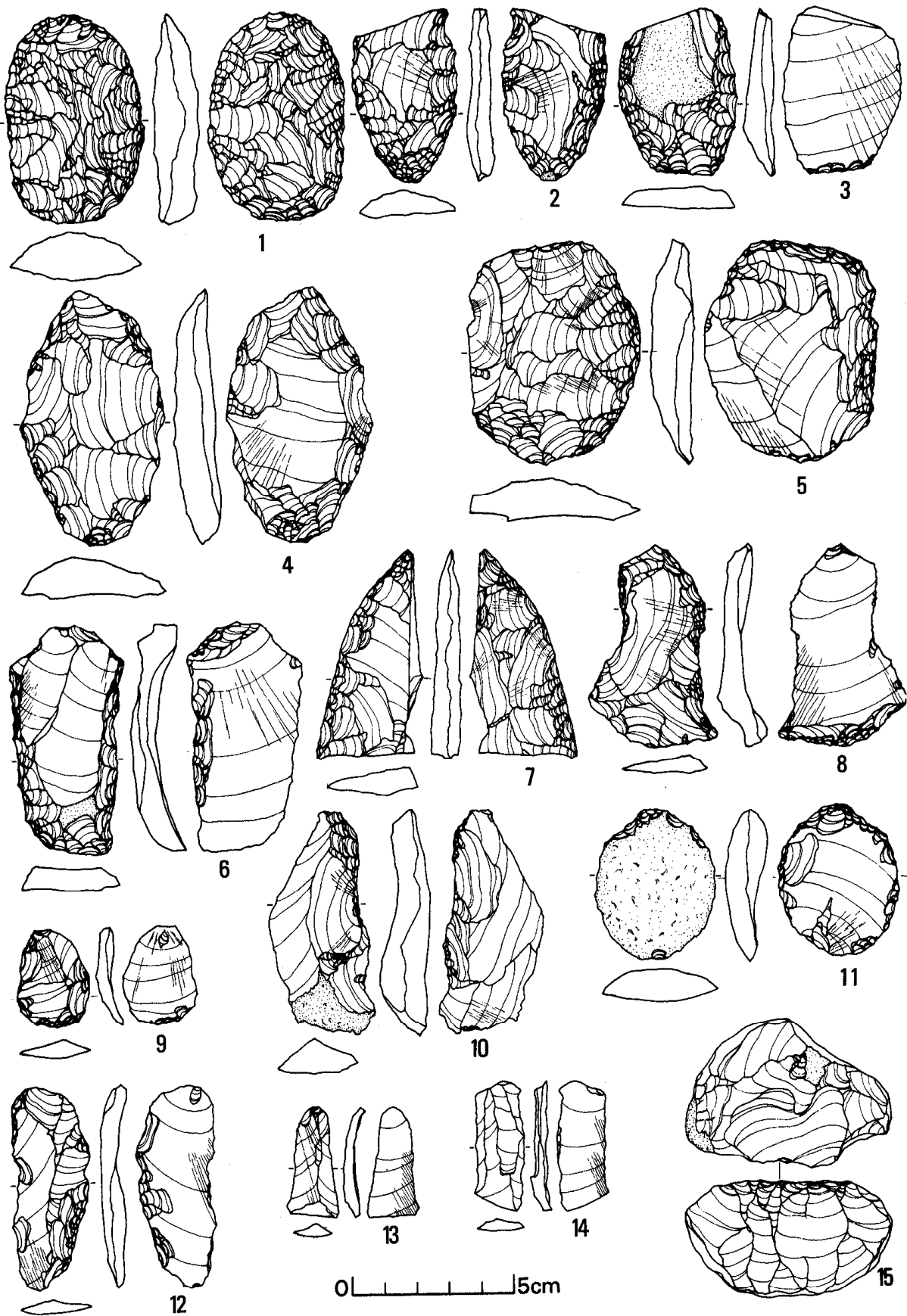
二次加工はもたないが、第5図13、14の粗雑な石刃様剥片を図示した。石核との関係から、本石器群の中で欠かせない資料のひとつであると考えられる。

4. おわりに

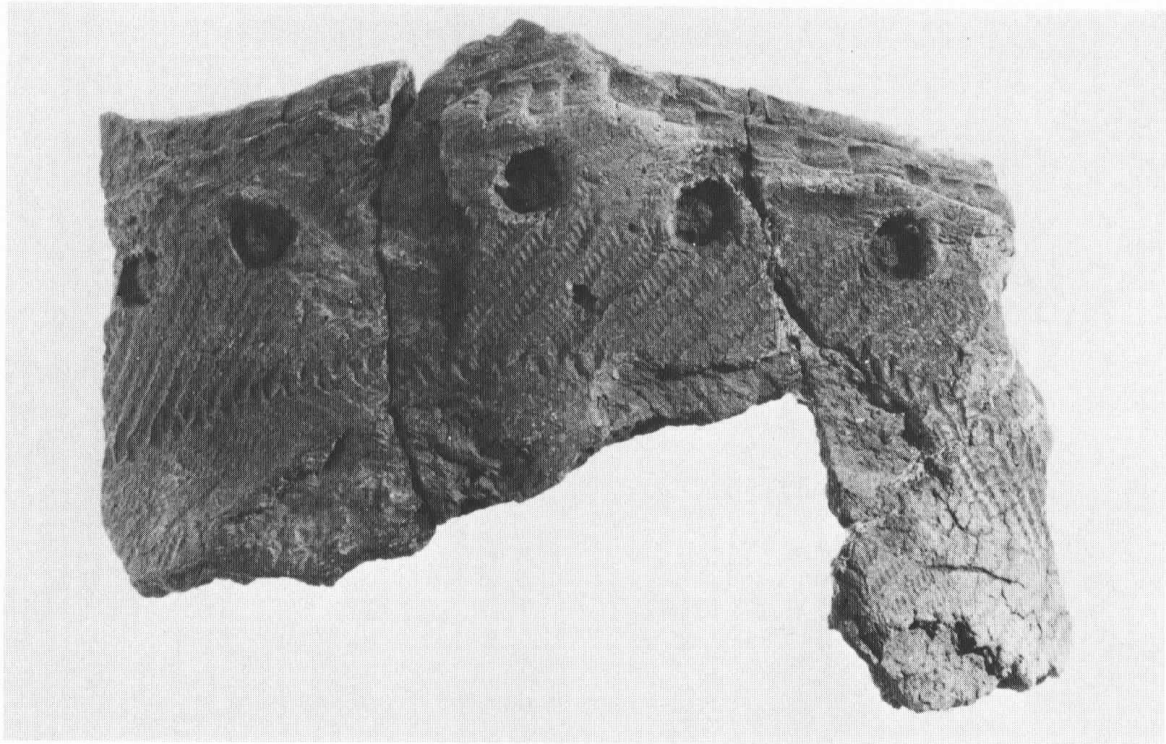
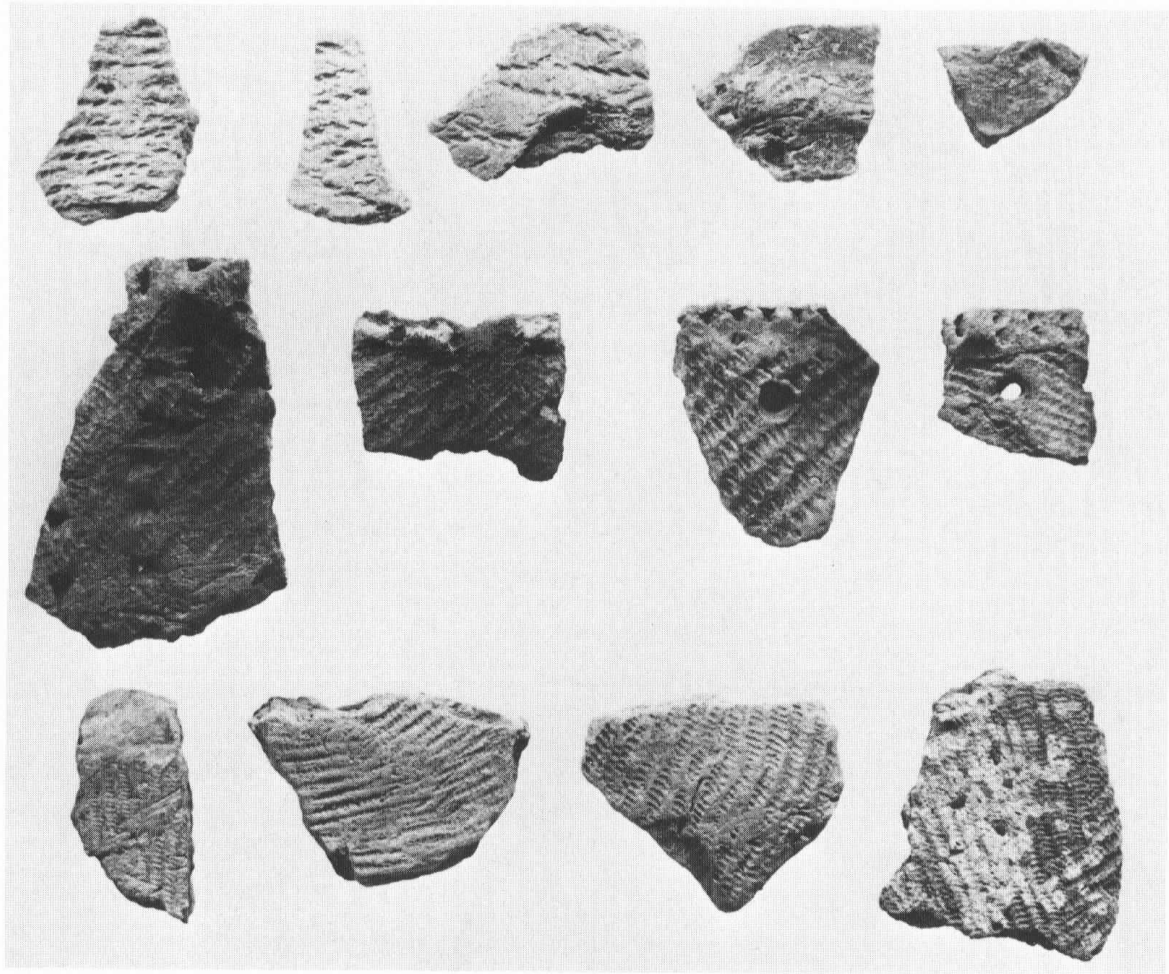
奥高安遺跡は、現海岸線から直線距離で8.8km離れた和天別川の支流シャチホロ川の水源近くにある小規模遺跡である。シャチホロ川は小流で底質からいってもサケ・マス等の魚獲に好適な産卵の場を提供する川ではない。遺跡立地の面でも比較的傾斜がきついという難点を備えた場である。にもかかわらず、狭い面積に縄文早期末にはじまり、前期を経て中期の2、3の時期にまたがり、継続的にはあるが利用されている。おそらく、それは、ここを基点に半径7km圏内で接するパシクル川上流域、音別川中・上流域、和天別川本流及び支流の恋隠川、さらに10km圏で接する茶路川の中・上流域などとのかわ



第4図 白糠町奥高安遺跡採集の石器 I



第5図 白糠町奥高安遺跡採集の石器2



写真Ⅰ 白糠町奥高安遺跡採集の土器



写真2 白糠町奥高安遺跡採集の石器

りの中で、狩猟・採集の場として、又それらに伴う移動ルート面で意味ある地理的空間であったからであろう。

次に土器についてふれたい。東釧路Ⅳ式は本遺跡の利用開始期を示すものである。第2図4の土器に類似する隆起帯を有する土器は、北筒式の占手にもあるが、口縁形態が異なる。厚岸町太田12号遺跡では無節の縄文に隆起帯、刺突文の施文された土器と伴に同じような断面の土器があるがこれも断面形態を異にしている（西編1976）。前期の押型文土器に伴出する撚糸文土器にもあり、これら近い関係にあることは確かである。道東で未見の円筒下層末期及び円筒上層末期に対比される土器が出土した意義も大きい。道東の既知のいずれの型式に伴うかについて詳しくふれる余裕を持たないが、道央・道南の土器との関係を具体的に考える素材であることは確かである。モコト式の分布は道東を中心に道央に及び編年の位置についてはトコロ6類より古いとする見解と新しいとする二様のみかたがある（藤本1980）。根室地方には未見だが、十勝、釧路地方では阿寒町オンネサルンベツ（澤ほか1965）、音別町トウンベ（富水1967）、標茶町金子（宇田川1977）、弟子屈町屈斜路コタン（澤ほか1978）、釧路市貝塚1丁目（註2）、池田町池田（註3）、浦幌町平和（後藤1979）の各遺跡の出土例がある。弟子屈町屈斜路コタンは最もまとまった量を出土した遺跡だが、付近には、別に北筒式の各型式の出土遺跡があるが、これらとの関係は不明である。これまでのデータからすれば北筒式土器群より古く位置することは当然の帰結であろう。しかし、モコト式は、今後2・3の段階に分かれる可能性を備えていて今後検討の余地を残していることは確かである。

本遺跡の石器群については、表採資料であるため土器群も含めて層位的な前後関係が明確ではない。加えて、縄文中期の石器群として把握した場合においても、石器群のセットが出揃っていないとはいえず、本来伴出しても不自然ではない石銛とされるグループ、石斧、砥石、石鋸など幾つかの欠落していると思われる石器がある。しかし北筒Ⅱ式土器の伴出石器群を例にとった場合においても沿岸部、河川に沿った内陸部とそれぞれに生活基盤が異なり、既にトコロ貝塚の報告者が述べているように、その石器組成はかならずしも同一ではない。本遺跡の断片的な資料からの即断は許されないが、遺跡の立地から考えても、狩猟・採集を主とした生活基盤における石器群の組成を想定できる。本遺跡の土器群とも比較的共通した特徴を備えている白糠郡音別町トウンベ遺跡の石器群は表採資料ではあるが285点の石器がある。有柄、無柄の石鏃、石銛とされるグループ、石槍、石匙、削器、

磨製石斧からなり、石鏃、石槍、削器が多出する傾向にあるという。本遺跡においては、磨製石斧は欠くが、おおむね共通した石器群の様相が窺える。削器の中でも特に楕円形のやや大型のグループはトウンベ遺跡にも認められ、削器の多出する傾向は共通している。

従って、本遺跡においては、石鏃、石銛、石槍などの直接生産用具を量的に欠くものの、全体としては前述したとおり狩猟、採集を軸とした石器群として位置づけることが可能であろう。

石器群の中で特徴的なものとして第4図13に示した異形石器がある。実体顕微鏡の観察によると明らかに使用の痕跡が認められる。中央部の張り出しをもたない部分の両面、下端部の両面に横走る擦痕が観察され、磨耗痕もみられる。従って、尖鋭な先端部を利用した石器と考えられ、第4図1～11の石器の機能と共通するものであろう。

註

1. 本資料を実見して大沼忠春氏は円筒上層cないしdに、桑原護氏は円筒上層dに比定されている。
2. 釧路市埋蔵文化財調査センター所蔵資料による。
3. 昭和43年、同44年の池田町教育委員会の調査で縄文に隆起帯のある土器が出土している。

引用参考文献

- 宇田川 洋（1977） 北海道の考古学1 北海道出版企画センター
- 大島直行ほか（1975） 森越 知内町教育委員会
- 後藤秀彦（1979） モコト式土器の新資料、浦幌郷土博物館報告13 p.10-12
- 澤 四郎ほか（1965） 北海道阿寒町阿寒湖畔オンネサルンベツ遺跡発掘報告、北海道阿寒町の文化財先史文化篇第二輯 p.1-24
- 澤 四郎ほか（1978） 弟子屈町屈斜路コタン遺跡調査報告、弟子屈町教育委員会
- 澤 四郎（1979） 北海道の土器、世界陶磁全集1、日本原始 p.185-198
- 新庄久志（1976） 釧路圏の植生とその特徴、釧路圏振興協議会
- 藤本 強（1979） 北辺の遺跡、教育社
- 藤本 強（1980） モコト貝塚採集の土器、ライトコロ川口遺跡 p.161-169
- 富水慶一（1967） 白糠郡音別町トウンベ遺跡出土の遺物、北海道考古学3 p.31-37
- 西 幸隆編（1976） 北海道厚岸町太田12号遺跡、厚岸町教育委員会